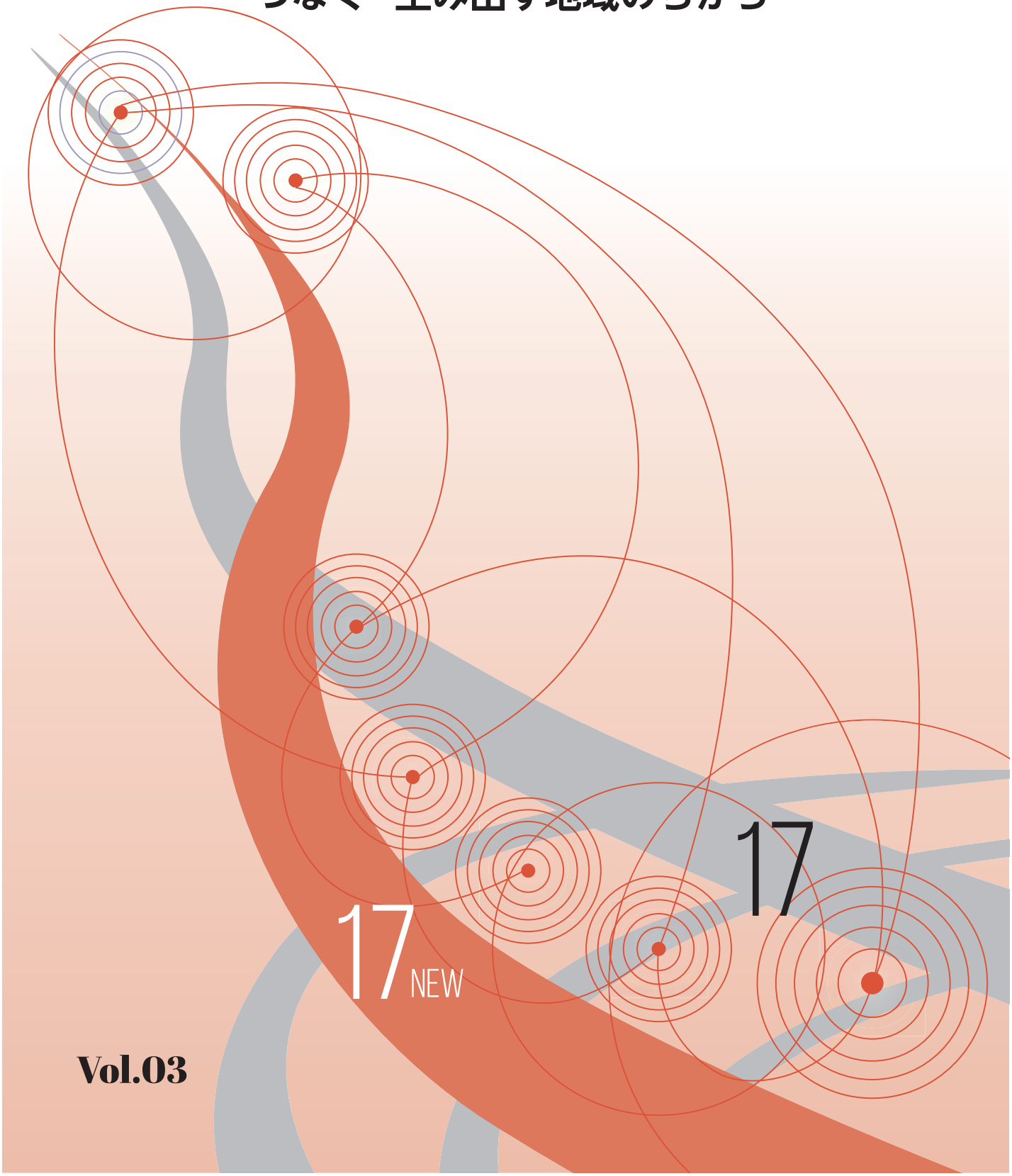
新中山道

～つなぐ・生み出す地域のちから～



Vol.03

桶川市

活気あふれる交流拠点都市を目指して

「夢と希望を未来につなぐ持続可能なまちづくり」を目指す小野克典桶川市長。全国に繋がる広域道路網を得てどのように活用していくのか過去から現在に至る成果と未来へ向けた抱負を伺った。

桶川市長
小野 克典氏

宿場町から全国を繋ぐ結節点へ

古くから農産物の集散地となっていた桶川は中山道の宿場町として栄え、人やモノ、情報を繋ぐ交通の要衝でした。江戸時代後期には染料の原料となる「紅花」の一大産地として知られるようになり、各地から商人が集い、桶川に大きな繁栄をもたらしていました。

昭和45年には市制施行によって桶川市が誕生し、今年で50周年の節目を迎えました。埼玉県のほぼ中央にあり、かつ都心から40㎞圏内に位置する桶川市は高度成長期を通じて鉄道を使った通勤、通学に便利な住宅都市として人口増を果たし、少子化に悩む現在にあっても約7万5千人の人口を維持し続けています。

そんな桶川市の「今」を特徴づけているのが縦横に整備されつつある高規格道路の存在です。2015年には国道17号上尾道路との交差部に位置する圏央道桶川北本ICから白岡菖蒲IC間が開通し、これにより常磐道、東北道、関越道、中央道、そして東名高速に至るまで全国に伸びる高速道路へのアクセスが容易となり、桶川加納ICと合わせ、市内で2つの圏央道ICを利用できる便利な地域となりました。

2016年には新中山道となる国道17号上尾道路のI期工事区間が開通、市西部にも有用な高規格道路が誕生し、市東部の国道17号（現中山道）、旧中山道と合わせ、南北に縦断する3本の幹線道路がほぼ完成。東西に伸びる圏央道及び県道川越栗橋線と要所要所で接続し、埼玉県央と周辺地域、そして全国を結ぶ一大結節点として新たな一歩を踏み出したのです。

現在の振興計画とその成果

2011年度から10年間にわたって取り組んできた第五次総合振興計画のキャッチフレーズは「みんなで　つくり　育む　活気あふれる交通拠点都市　おけがわ」です。日常生活圏域ごとに都市機能を配し、歩いて暮らせるまちづくりを行い、これを東西に広がる水辺や農地と融合させつつ、新たな広域交通網を活かしたまちづくりを目指すものです。圏央道の2つのIC周

辺を「複合開発エリア」とし、地の利を活かし、製造業や流通業など民間企業の誘致を進めているのもその一環です。

また公有地を活用しつつ民間に建設や維持管理をお任せし、その工夫や経営ノウハウを採り入れながら市財源を節約する「公民連携事業」にも積極的に取り組んできました。スーパーや図書館、託児機能付きワーキングスペースを擁したフレスポ桶川や、書店と図書館の融合を図った桶川駅西口の「ＯＫＥＧＡＷＡ ｈｏｎプラス+」もその成果です。

また、戦後75年を迎え、近年、戦争を経験された方々も年々少なくなる中、平和を語り継ぐ拠点として「桶川飛行学校平和祈念館」を開館させ、3か月で9千人の来館者にお越しいただくことができました。また、上尾道路に隣接した城山公園にバーベキュー広場を整備し、市内外を問わず多くの皆さんにご利用頂いています。現在はその城山公園の対面に道の駅「（仮称）おけがわ」の整備を進めています。桶川北本ICに近接し、首都高速大宮線から北に延びるルートでは最南端に位置する道の駅への期待は大きく、地元の農畜産物を扱ったり、防災機能を持たせ、公民連携の手法を上手く使って地域の活性化に繋げていきます。

今後桶川が果たすべき役割

こうした商工業の企業誘致や公民連携事業の展開、そして観光資源の整備は一見バラバラに見えますが、これらを全て結びつけるのが幹線道路網の存在です。桶川市は東西に広く、鳥が大きく羽を広げたような形をしています。市の中心となる駅周辺には、都市拠点として商業ゾーンを配し、その駅を中心に市街地が同心円状に広がりを見せています。その両翼の圏央道IC周辺には工業系ゾーンや複合開発エリアが配されています。そして西側の上尾道路周辺には新しい観光エリアや緑のエリアが点在しています。

これらの拠点へのアクセスが圏央道と上尾道路を含む幹線道路網の整備によって素晴らしく便利になり、市民や企業の域内流動性が格段に向上しました。同時に全国各地への移動、そして全国各地から桶川への移動に必要な時間的、空間的制約も大きく改善されます。市民が住むにも旅行に出かけるにも魅力的なまちとなり、商いをするにも物作りをするにもそして物を運ぶにも便利な場所となりました。

そのような所には人やモノ、情報や資金が集まります。それが市の財源確保や雇用の創出につながり、それがまた複合開発や都市機能、生活基盤の整備となって市民や企業に恩恵をもたらします。そしてまた人やモノ、情報や資金が集まる…というプラスのサイクルができあがれば私の掲げてきた「夢と希望を未来につなぐ持続可能なまちづくり」も大きく前進します。

今後、桶川北本IC以北の上尾道路Ⅱ期工事と首都高速から続く新大宮上尾道路が整備されていけば、県北や都心へのアクセスも一段と向上します。そうすれば、首都圏をカバーする広域交通網の結節点としての桶川が果たすべき役割はさらに大きなものになるはずです。こうした新たな道路とその機能性を存分に活かしながら、桶川を「すみたいまち」としてだけではなく「訪れたいまち」として大きく羽ばたかせていきたい、と考えております。

「桶川飛行学校平和祈念館」
2020 年 8 月 4 日開館

桶川市商工会

桶川の地力を活かす

新たな道路網や市街地整備によって桶川がどのように変わりまた変えなければならないのか1960年から地元の商業や工業を支援してきた桶川市商工会の第八代会長加藤清氏に未来を見据えたお話を伺った

桶川市商工会 会長
加藤 清氏

商工会の活動と現在の課題

桶川市商工会は今年で創立60周年を迎えました。商工会とは域内で営業する商工業者が自主的に運営する組織で、業種や業態の違いを越えながら互いの振興を図り、広くは社会的、文化的な側面についても地域との融和を図り、地域の経済を支援していく立場にあります。その活動は多岐にわたり、会員に対して経営相談や融資のご案内をしたり、税理士や社会保険労務士との無料個別相談会を設けたり、歳末大売り出しの実施やその支援、あるいはサンタ姿での一般ご家庭訪問などなど、地域の企業活動と生活に根ざした取り組みを日々行っております。

おかげさまで桶川市は少子高齢化の時代においても人口減に至ってはおりませんが、中小の商工業者にとっては後継者不足の問題から、事業継承がより難しくなる時代になって参りました。今年はコロナ禍の影響もあって景況感が悪く、予断を許さない状況が続いています。商工会としても会員数減少への対策が急務となっており、市の行政と連携しながら駅前商店街の空き店舗対策を行ったり、入会促進の巡回強化などを行っておりますが、こればかりは一朝一夕に解決できる問題ではありません。

一方で圏央道や上尾道路などの道路網の整備によって桶川は商工業や物流の拠点として魅力ある地域として変貌を遂げて参りました。そして高崎線沿線として最後に残った駅前再開発地域として桶川駅東口がクローズアップされていることもあり、これら道路や鉄道といった交通拠点の整備に合わせ、商工業の発展を計って行きたいと、考えております。

桶川の潜在能力を活かすには

歴史を紐解いてみますと、江戸時代から中山道の宿場町として、そして紅花の産地として栄えてきた桶川には交通の要衝としての機能と農産物の集散地としての役割がありました。当時、日本橋を出立した旅人が丸1日歩いて最初の宿を求めたのが桶川宿だったと言われており、古の面影を残す旅籠が今でも中山道に散見されます。また、江戸時代末期に天皇の皇女和宮が将

軍の正室に降嫁する際、数万人もの大行列で宿泊したという桶川宿本陣の遺構も県指定文化財になっています。今年8月に開館した桶川飛行学校平和祈念館もそうですが、桶川はこうした歴史資産や観光資源に恵まれているのです。

一方で現在の桶川には圏央道やその2つのインターチェンジ、そして上尾道路や首都高速から続く新大宮上尾道路といった広域交通網が着々と整備されつつあります。そしてまた、ドライバーが待ちわびていた大型複合休憩施設「道の駅」が設置されることになり、桶川が新たな交通の結節点、物流の中継地点として、そしてまた旅人の憩いの町として、古の桶川宿以上の賑わいと存在感をまた獲得しようとしています。歴史、観光、商業など様々な側面で地力を蓄えてきた桶川が、幹線道路網の整備という強力な後押しを得て、まさに今上昇気流に乗ろうとしている姿が見えて来ます。我々商工会もこの機に乗じ、ITなどを駆使しながら桶川の商工業の発展を図って行かねばなりません。

変わり行く桶川とその未来

圏央道の開通により、東名高速から関越道、東北道、常磐道、そして東関東道に至るまで全国に伸びる高速道路網に簡単にアクセスできるようになり、インターチェンジ周辺には工場や倉庫が多数進出し、公民連携の複合開発なども進みました。特に桶川北本IC近くの川田谷地区は今後も企業誘致が期待できる開発地域として我々も注目しております。

また、上尾道路と接する桶川北本IC周辺も開発が進み、先述した道の駅の計画も進んでいます。この道の駅には休憩機能や防災機能としての役割のほかに、地域の特産品や農産物の販促、あるいは桶川の地理や歴史をアピールしていく総合集約的な機能が期待されており、一般の方はもちろん、商工業や農業関係者などあらゆる人から喜ばれる施設に仕立てるべく、私たちも強く働きかけていきたいと考えております。

行政やメーカーの努力によって車の性能が上がり、新たな道路を整備しても近隣住民からの苦情が少なくなったことは幸いです。市が進める都市計画のおかげで住宅地と商業地、そして工業エリアの住み分けも進み、新たに進出する商工業者にとっても立地的な不安はなくなりつつあります。今後、道路に関する希望としましては、北本から鴻巣、熊谷バイパスへと県北へのアクセスを容易にする上尾道路（II期）の早期開通、そして県南の首都高から続く新大宮上尾道路の上尾南ICまでの早期開通です。その先、桶川北本ICまでの区間の整備も大変望まれるところです。これら、桶川市を東西南北に貫く幹線道路の完成により人や物の往来が増え、雇用が生み出されていけば事業継承も行われやすくなり、商工会の会員数も増加に転じることでしょう。そして桶川の持つポテンシャルがさらに引き出され、経済にも大きな恩恵が与えられることと確信しております。

市民まつり商工の広場（提供：桶川市商工会）

株式会社日立物流

物流の効率化を加速させる道路の役割

人手不足、高齢化、安全対策、環境負荷の低減、高効率化など様々な課題を克服しながら常に物流システムの進化を牽引してきた日立物流首都圏営業本部長の西川氏に未来を担う物流の姿と道路が果たすべき役割を伺った

株式会社日立物流
執行役　首都圏営業本部長
兼 経営戦略本部 副本部長
西川和宏氏

全世界に広がるネットワーク

日立物流は現在４つのコア事業から成り立っています。一つ目は３ＰＬ事業です。お客様のサプライチェーンにおける物流業務を包括的に受託するこのサービスは社内でも歴史が古く、現在も国内のリーディングプロバイダーとして自負しております。次いで発電所のタービンなどの重量物を輸送する重量機工事業。そして輸出入の手配を航空機や船舶、鉄道など多様な輸送手段を使って行うフォワーディング事業、４つ目はＭ＆Ａによって新たに加わった自動車部品物流の事業です。これらを支えるネットワークは全世界に広がり、拠点数は１０３社７６１か所、グループ人員は４万５千人以上、車両保有台数は１万７千台弱というのが現在の姿です。（※２０１９年度）。

３ＰＬ事業は80年代から本格化させたもので、以前はお客様ごとに倉庫管理システムを最適化させる手法で調達、生産から販売、流通、アフターサービスに至るまでトータルに請け負っておりました。ところが近年になりますと、こうしたモノの流れを情報の流れと結びつけ、サプライチェーン全体で情報を共有、連携させることが大切になってきます。更に各々のプロセスを標準化することで普遍化と効率化を図り、これによって蓄積されたビッグデータで業務シミュレーションを提案できることが当社の強みにもなりました。そして時代に合わせて環境問題や安全対策、人手不足といった課題に対応しながら現在に至っています。

ＥＣ事業の拡大と地域への貢献

今年はウィズコロナによるニューノーマルな生き方が声高に叫ばれる中、ネット通販に代表される個口配送が大幅に増加し、中小企業はもとより個人のお客様がより多くの荷物を発送することが常態化してきました。

この状況をある意味予見していた当社では春日部にＥコマース向けの専用施設を開設、AI・ロボティクスを駆使して業務の７割以上を自動化させました。そして、それらの設備、情報システム、保管・作業スペース・マンパ

ワーを複数のお客様でシェアリングいただくことでスペース効率を最大化、業界初の従量課金型料金を実現しました。これによって、中小事業者に向け、初期投資ゼロという魅力ある提案を行うことができました。とはいえ発送業務における「人」の役割は依然大きく、今後は自動化を進めながら昼間は人が働き、夜はロボットだけで業務を遂行するといったハイブリッド型センターの導入を進めたいですね。周辺地域からの人的資源も大切にさせていただきながらエコロジーでエコノミーな地域エコシステムとしての拠点作りが大切だと思います。

また日本の物流の90％以上（トンベース）を占めるトラック輸送の安全対策についても産官学連携で取り組んでいます。ドライバーの体調や車両の挙動を各種センサーによりリアルタイムで把握することで事故を未然に防ぎ、道路の危険箇所や渋滞情報なども即時に管理者に共有化、安全で迅速な輸送に役立てています。環境面につきましては鉄道や船舶利用の増加によるモーダルシフトの推進に加え、車両の省エネ化、輸送に伴う資材の再使用率のアップ、廃棄物の削減などによって更なるCO_2排出量の削減を図っています。

春日部 EC プラットフォームセンター

道路が地域の価値を高める

こうして未来に向け、物流に関わるエネルギー利用の効率化を進めていく中で、やはりクローズアップされて行くのがトラック輸送と道路のあり方です。圏央道の開通により関東一円の主要高速道路間のアクセスが飛躍的に向上し、当社の拠点の多くもこのエリアに配置しています。そんな中、未開拓だったのが東北道と関越道に挟まれた上尾道路沿線エリアです。ここには古くから国道17号がありますが、幾つかの交差点で慢性的に渋滞が発生、時間的ロスの多いルートとして課題になっていました。また、車幅が年々増して行く中、右折車線に入った大型車両が走行車線の大型車両を阻害したり、トラックが自ら渋滞を作ってしまうような状況も多々ありました。

このような状況下、幅員が格段に広い上尾道路のⅠ期工事が終わり、大型車両でも余裕を持った通行が可能になり渋滞も減っています。今後、Ⅱ期工事によって鴻巣の箕田まで繋がるとそこから熊谷付近にかけての地域も物流の拠点となる可能性が見えてきます。

また、首都高から続く新大宮上尾道路が完成すると圏央道に接続する桶川エリアまでの所要時間が減り、往復利用なら30分という大幅な時間短縮が見込まれます。そうするとトラックドライバーの長時間労働の改善や、環境負荷を低減することができますし、今まで1回しか運べなかったものを2回運べば生産性の向上にもつながります。さらに、このエリアに新拠点を整備することで付近のスタッフの通勤時間が短くなり、あるいは新たに当社に魅力を感じてくださる方も増え、雇用の確保という面でも大きな効果が見込めます。

こうして見ると道路の整備と物流、地域経済、環境、安全は切っても切れない関係にあることがわかります。このエリアに引き続き注目しながら、新たな物流の未来を切り拓いて行きたいと考えています。

株式会社新都市ライフホールディングス

人が輝き、笑顔が溢れる街作りを

桶川駅のランドマークとして長年市民に親しまれてきたパトリア桶川（おけがわマイン）この10年で首都圏幹線道路の結節点へと成長した桶川で商業施設はどう変わりそして未来をどう見つめているのか新都市ライフホールディングスにお話しを伺った

株式会社新都市ライフホールディングス
第四エリア経営部長
矢田部 聡 氏

生まれ変わったパトリア桶川

株式会社新都市ライフホールディングスはショッピングセンターの開発や管理運営を行っており、現在は首都圏エリアを中心に、大小様々な80の施設を運営しています。

パトリア桶川は おけがわマインの愛称で親しまれており、同施設は１９８８年に開業しました。隣接するＵＲ都市機構の団地にお住まいの方をはじめとした地域住民の方の暮らしを支える施設として、当時は地域で唯一の大規模ショッピングセンターとして桶川駅西口に直結して作られました。

なお、私が担当させていただいているエリアは埼玉と東京の北部地域なのですが、その管理事務所が赤羽と桶川にあり、ここパトリア桶川はいち商業施設であると同時に、隣接する地域の商業施設を管理応援するサービス拠点としての性格も持ち合わせています。

さて、このパトリア桶川ですが実は２０１５年に大幅なリニューアルを行いました。時代とともにお客様のライフスタイルが変化し、文化や交流、健康や福祉といったニーズへの対応が必要となったためです。

コンセプトは「まちの駅ＳＣ」。立地特性を活かし、駅前にあると便利なサービスを揃え、道の駅のように地域に根差した空間を目指しました。その目玉のひとつが「ＯＫＥＧＡＷＡｈｏｎプラス＋」でした。

駅前の施設にさまざまな価値を！

「ＯＫＥＧＡＷＡ ｈｏｎプラス＋」は図書館や書店等がコラボした「文化・交流のための活動拠点」を目指したスペースです。パトリア桶川３階に11万五千冊の収容能力を備え

パトリア桶川（おけがわマイン）

OKEGAWA hon プラス＋

エンジョル広場

た桶川市立中央図書館と大型の書店（丸善書店）が隣接し、互いの書籍を検索できるように連携。座席を多くして滞在型の施設を目指したほか、隣接してカフェやリラクゼーション、イベントスペースを配置。桶川市や丸善グループと定期的に相談しながら講演会やワークショップ、パネル展示などのイベントも開催し、市民の皆さんに向け様々な学びを随時提案しております。

また、4階には保育園やクリニック、市役所連絡所や地域包括支援センター、ホットヨガなど生活をサポートするサービス拠点を配置。1、2階には東武ストアの食料品、衣料品、生活用品の売り場を中心に飲食店や服飾・雑貨の専門店を効率的に集約させました。これによりパトリア桶川はショッピングセンターとしての機能のみならず、文化の発信やお客様の日々の暮らしをサポートする地域密着型の商業施設として大きく生まれ変わることができたのです。お客さまからも「地域と共にという姿勢が強く感じられ、好感が増した」「駅から近いだけでなく公共機関、医療施設、ATMなど生活に必要なことが網羅されていて使いやすい」などのご意見をいただき、来館者が増えただけでなく、若い方々の割合が増える、といった嬉しい効果が現れています。

道路網整備が変える桶川の未来

こうした変化により上尾市、北本市、伊奈町など少し離れた地域からのお客さまも増えました。これらの地域の図書館が相互に利用協定を結んでおり、自由に貸し借りが出来ることも大きな理由でしょう。休日になると自動車でのご利用の方が増える傾向にあります。

気が付けばこの十数年の間に圏央道の開通や桶川加納IC、桶川北本ICの開通、そこに繋がる上尾道路（Ⅰ期）の開通など、桶川を取り巻く幹線道路の環境は大きく様変わりいたしました。その影響は物流面でも現れ始め、東武ストアへは新座の物流センターから配送する生鮮食品や日配品の配送が遅滞なく行われるようになりました。関越自動車道から圏央道、そして上尾道路や県道12号線、57号線の連携が非常に良く、お客様からも「魚や野菜の鮮度が良い」とのご意見をいただいています。

我々が鶴ヶ島や茨城の商業施設のサポートに駆けつける際の時間も大幅に短縮されました。それも2分の1、3分の1という劇的な変化です。また、上尾道路によって南下の動線が整備されたことにより、浦和や武蔵浦和への出張も容易になりました。この先、桶川より北の上尾道路（Ⅱ期）が開通すれば鴻巣方面からのアクセスも向上し、さらなる集客に繋がるでしょう。いや、それだけではありません。大宮や首都圏への「通勤力の向上」はこの地域の「商圏人口の増加」にも繋がります。それにより、私どもの施設の利便性と公益性の高い空間、そして地域に密着した諸活動をより多くの人にご利用頂けるのであれば望外の喜びです。上尾道路（Ⅱ期）の1日も早い開通を願っております。

山田食品産業株式会社

美味しい食材をより早くより多くの方に

日本の伝統食品としての「麺」にこだわりながら庶民の日常食をリーズナブルに届けてきた山田食品産業埼玉を中心に約160店舗という大きな出店規模を持つ同社に圏央に整備が進む道路と物流そして事業の展望を伺った

山田食品産業株式会社
営業企画課 部長
江橋 丈広氏

屋号の変更で新規顧客を開拓

「山田うどん」は今から90年前に埼玉県所沢市に手打ちうどん専門店としてスタートした会社です。ここ武蔵野の台地は武蔵野うどんの産地として知られていますが、江戸時代から小麦や大麦の生産が盛んな地域であり、当社もその地の利を活かして1959年に製粉工場を建設、1964年には製麺工場も増設し、その翌年にはお客さまに直接「麺」を提供する食堂として「山田うどん一号店」をオープンさせました。

当時はうどん1杯70円ほどでしたが、自社製麺の強みを活かして35円でご提供を始めたところその安さで有名となり、のれん分けによるフランチャイズ店が激増し、一時は関東一円に280軒近くまで出店することとなりました。

その後1970年代に始まったファミリーレストランブームに対抗してご飯や惣菜など麺以外のメニューを増やした結果、同じメニューや味を担保しやすい直営店の経営にシフト、採算店舗への集約化などを進めた結果、現在は一都六県に約160店舗という数に落ち着いています。

こうして既にうどん屋というワクを越え、豊富なメニューを展開していた我々は2018年に屋号を「山田うどん食堂」に変更、トレードマークのかかしも従来「への字」だった口元を笑顔にするなど外看板も大幅リニューアルし、メニューにも見た目に鮮やかな野菜の彩りを増やしました。こうすることで従来まで多かったガテン系のお客さまに加え、ファミリー層や女性顧客の獲得を目指したのです。

工場と配送センターの集約化

この間、1980年に製麺工場を入間武蔵野工業団地に全面移転させたのを皮切りに、同工場内に惣菜工場も併設し、次いで製粉工場も移転させるなど、文字通りセントラルキ

ッチンとしての効率化に注力しました。また2001年には工場に隣接した土地に入間配送センターを稼働させ、生産から各店舗への配送業務まで全ての機能を入間に集約させることができました。ここから160店舗への配送は3トントラックにて12のコースに分け、元旦の休業日以外は毎日行っています。時間帯によっては一般道の渋滞に巻き込まれるケースがあり、輸送時間の効率化は我々にとっても重要な関心事です。

また現在は半数の店舗に毎日配送し、残りには1日置きに配送していますが、より新鮮な食材をお届けするために配送コース組み替えによる配送回数増を検討しています。移動時間の効率化、短縮化によるコスト増回避は我々にとって重要な課題になっています。

とりわけ埼玉県エリアには山田うどん食堂の55％以上が集中しており、入間からさいたま市に向かう国道16号や国道17号、新大宮バイパス、上尾道路といった幹線道路の渋滞緩和は弊社にとっても大きなメリットがあります。もちろん他県の店舗と入間を効率的に繋いでくれる圏央道の整備が大きく進んだことも効率化に結び付いています。

定番メニュー「パンチ定食（もつ煮込み）＋うどんセット」

物流の効率化は食品産業の願い

山田うどん食堂は幹線道路や国道と国道を結ぶ主要地方道のロードサイドなど、車の行き来の多い地域にも数多く出店しています。したがってこれら幹線道路の整備により、周辺地域の道路が利用しやすくなり、交通が活性化されることでトラックドライバーの方を始め、車で移動されるより多くの皆さまに当店をご利用いただけると期待しています。

また現在我々が力を入れている業務のひとつが通販メニューの充実です。2020年の9月に目玉商品として「手作ちうどんキット」を発売しました。これはうどん玉を脚で踏み、伸ばして切って茹でるまでの工程をご家庭で楽しめるようにしたもので、親子一緒に、あるいはお爺ちゃんお婆ちゃんも含め三世代一緒に楽しめる食べ物として発売以来メディアでも多数お取り上げいただき、好評を博している製品です。現在はこれら通販の食材は全て冷凍品だけを扱っておりますが、今後はご家庭の冷凍庫の容量に縛られず、冷蔵や常温でも保存が効く商品も積極的に開発し、通販事業の発展を図って行きたいと考えています。

いずれにせよ、ニューノーマルの世界では今より更に物流が大切になって行くことは間違いありません。原材料を工場に運び、そして工場と各店舗、あるいは宅配業者を通じてお客さま宅を結んでいるのは道路とトラックの存在です。この物流過程の時短と効率化は我々食品を扱う産業が古くから願ってきたことでもあります。

今後も桶川北本IC以北の上尾道路Ⅱ期工事や新大宮上尾道路が整備されていくと伺っていますが、これにより関東北部や南部エリアへの物流がさらに効率化されることが予想されます。武蔵野のソウルフード「山田うどん」の食材をより広く、より多くの方に、今までよりさらに迅速かつ正確にお届けできる日が訪れることを願ってやみません。

大宮国道事務所メッセージ

地域と共に創る道路
新大宮上尾道路・上尾道路（新中山道）

―地域の発展を目指して―

大宮国道事務所長
田中（たなか） 倫英（ともひで）

県内の骨格幹線道路網を整備・管理

埼玉県は、歴史的に日光街道や中山道など江戸を起点とする放射状の街道が発達し、これらが現在の国道4号、17号へとつながっているとともに、高速道路についても、東北自動車道、関越自動車道などの放射状道路が県内南北方向に先行的に整備されてきました。一方、県内の東西方向を結ぶこととなる環状道路は長年国道16号が中心でしたが、近年、東京外かく環状道路（外かん道）や首都圏中央連絡自動車道（圏央道）が概成し、県内の骨格幹線道路網を形成しています。

大宮国道事務所では、これらのうち、国道4号、16号、17号の総延長約266kmの整備、管理を担当しています。

国道17号の役割強化

新型コロナウィルス感染症により、皆様の生活、社会・経済活動は大きな変化を余儀なくされてい

新大宮上尾道路　宮前 IC 付近イメージ

上尾道路（II期）JR高崎線跨線橋イメージ

ます。そのような中、物流分野の役割が益々重要になっていることは間違いありません。円滑な物流を支えるとともに、頻発する自然災害における緊急避難あるいは緊急支援を担う道路として、国道17号は大きな役割を果たしています。現在、その役割をさらに強化し、安定的なものとすべく、大宮国道事務所では、上尾道路Ⅱ期、新大宮上尾道路等の整備を現在進めております。それぞれ、工事の着手、用地取得の着手、といった節目を迎えた昨年春頃には地域住民の皆様への説明会を予定していたところですが、新型コロナウィルスの急速な感染拡大という中、中止せざるを得なくなりました。

一方で、これに変わる方法として次頁で紹介させていただくようなウォークスルー方式の説明会や上尾道路ニュース、新大宮上尾道路ＮＥＷＳの発行など、事業の進捗状況の発信に努めているところです。

引き続き、新型コロナウィルス感染症拡大防止の対策を十分に取りながら事業を進めてまいりますので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

第３号発刊にあたって

本冊子は平成30年３月に、国道17号新大宮上尾道路及び上尾道路における話題等を地域の皆様にお伝えする一つの手段として創刊号を発行し、このたび第３号を発行するはこびとなりました。これもひとえに、沿線自治体や商工会、企業や地域の皆様のご協力、応援により実現できたものと感謝しております。

今後も、事業の進捗などをお知らせさせて頂きながら、地域の皆様とのコミュニケーションツールとしてお役に立てるよう考えております。また、地域の方々の道路事業に関心を持って頂く一助になれば幸いです。

Message

事業進捗紹介①上尾道路

国道17号の渋滞を緩和し、豊かな暮らしをサポート

上尾道路は、国道16号及び国道17号新大宮バイパスの宮前IC（さいたま市西区宮前町）から、国道17号の西側を並行し、鴻巣市箕田で国道17号及び熊谷バイパスに接続する延長20・1kmのバイパスです。

バイパスとバイパスをつなぎ、地域の道路網を形成するとともに、国道17号の交通混雑の緩和や沿道環境の改善が期待されます。現在供用区間の終点部にあたる桶川北本ICでは、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と接続しています。

高崎線交差部で橋梁下部工事を進行

上尾道路（Ⅱ期区間）と高崎線交差部は線路を越える橋梁となるため、線路の北側において令和2年3月下旬から橋梁を支える柱（写真1）の工事に着手しました。

国道17号接続部では工事用車両の専用道路と水路の切り替え工事及び地盤を強くするための地盤改良工事を実施しています。

延長約100mの橋梁を支える柱（橋脚・橋台）4基のうち、1基について地中に打つ杭と橋台を造る工事を進めています

設計説明会を開催

新型コロナ感染症拡大防止により延期になっていた上尾道路（Ⅱ期区間）の設計説明会を令和2年7月と8月に開催しました。

主要地方道東松山鴻巣線～国道17号間の地権者を対象として、道路設計の考え方や用地取得の流れ等の説明を行いました。

感染症対策として、一堂に会しての説明会に代り、事前予約制による少人数の参加とし、一方通行（ウォークスルー）方式のオープンハウス型の説明会として参加者同士の「密」を防止して実施しました。

上尾道路設計図面（1/1,000）の説明状況
（田間宮生涯学習センター）

設計説明等の動画閲覧状況
（田間宮生涯学習センター）

説明会で使用した設計図面は大宮国道事務所及び鴻巣市役所で閲覧できますので、ご希望の方は左記問合せ先までご連絡ください。

●問合せ先　大宮国道事務所　048-669-1200（代）
鴻巣市都市建設部道路課
大規模道路推進担当　048-541-1321（代）

上尾市小敷谷地先に歩道橋が完成

上尾道路（Ⅰ期区間）において歩道橋設置工事を行っておりましたが、令和2年7月に工事が完成しました（写真2）。歩道橋の完成に伴い、上尾市立大石南小学校の生徒に「小敷谷天神橋（こしきやてんじんばし）歩道橋」と命名していただき、令和2年7月30日に渡り初めを行いました。

小敷谷天神橋歩道橋（全景）

上尾道路の情報は、こちらでもご覧いただけます。
大宮国道事務所ホームページ
https://www.ktr.mlit.go.jp/oomiya/oomiya_index012.html

事業進捗紹介②新大宮上尾道路

圏央道沿線から都心へのアクセス性が向上し、地域の産業活動を支援

新大宮上尾道路は、国道17号の慢性的な交通渋滞の緩和や埼玉県中央地域の健全な発展などを目的とする、さいたま市中央区から鴻巣市に至る延長約25・1kmの高架構造の自動車専用道路です。

平成28年度に、さいたま市中央区円阿弥から上尾市堤崎（与野～上尾南間）の延長約8・0kmが事業化され、平成29年度から、国土交通省関東地方整備局と首都高速道路株式会社の共同で事業を進めています。

令和2年3月に都市計画事業の承認及び認可が告示されました。

※出入口の名称は仮称です

新たに設置する出入口

新大宮上尾道路（与野～上尾南）には、大宮、宮前南、宮前、上尾南の4カ所の出入口を設置する計画です。

宮前南と上尾南の出入口は、出口は桶川方面のみ、入口は東京方面のみとなります。また、大宮と宮前の出入口は、出口は東京方面のみ、入口は桶川方面のみとなります。

与野 JCT（仮称）付近　　令和２年２月撮影

地権者の方を対象とした設計用地説明会を開催しました

新型コロナウィルス感染症の拡大防止のため延期になっていた設計用地説明会を令和2年7月から8月にかけて開催しました。

感染症防止対策として、従来の一堂に会した説明会形式とせず、オープンハウス形式とし、参加される方は事前予約制とした上で、時間を分けて来場していただく形にて実施しました。

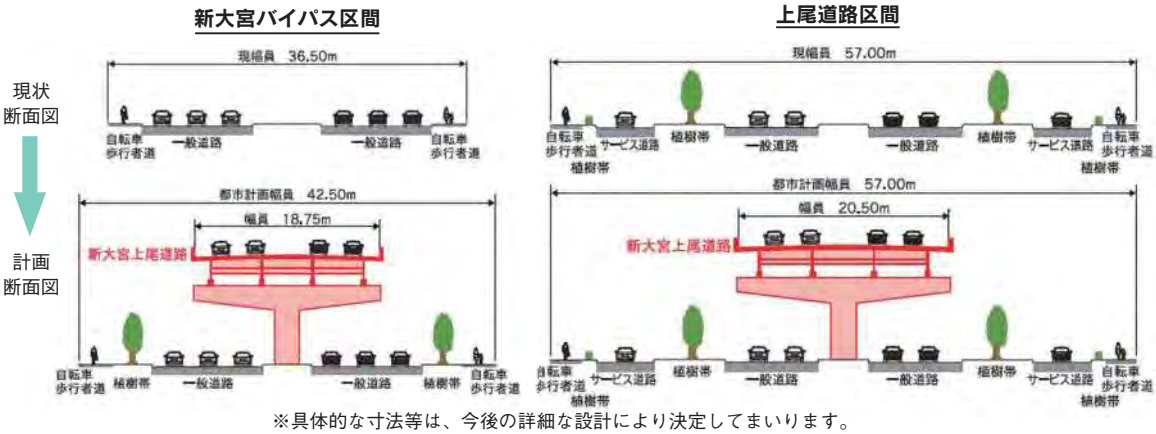
この説明会を踏まえて、令和2年8月に公共の敷地（道路等）に用地幅杭を設置しています。

説明会で使用した資料（動画）は大宮国道事務所のホームページでご覧いただけます。

幅杭の設置状況（イメージ）

オープンハウスでの動画閲覧状況

【標準断面図】



※具体的な寸法等は、今後の詳細な設計により決定してまいります。

イメージであり変更となる場合があります

イメージであり変更となる場合があります

※新大宮上尾道路は、沿道の皆様の視点及び一般国道走行中の視点を考慮し、大規模構造物による圧迫感や附属物等による煩雑感の軽減に配慮しながら設計を行っています。

説明会で使用した動画は、こちらでご覧いただけます。
大宮国道事務所ホームページ
https://www.ktr.mlit.go.jp/oomiya/oomiya00424.html

つながり、結ぶ

TOPICS

さいたま市
「住みやすい」、「住み続けたい」まちづくりを目指して

本市は、浦和市・大宮市・与野市の3市合併により、埼玉県下で初めての人口100万都市として誕生し、令和3（2021）年が市制施行20周年の節目となります。この間、平成15（2003）年4月に指定都市へと移行し、平成17（2005）年4月には、岩槻市との合併を実現しました。また、人口は約130万人を超え、首都圏居住のモニターを対象にした民間企業の調査によれば、「浦和」・「大宮」が「住みたいまちランキング」で第3位に選ばれるなど「選ばれるまち」としても発展してきているところです。

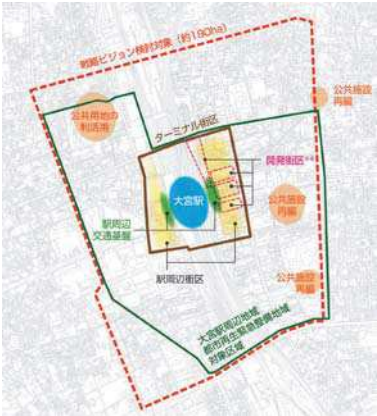
交通網に着目すれば、本市は、東北自動車道、東京外環自動車道、国道16号、国道17号、国道17号新大宮バイパス、国道17号上尾道路、国道298号、国道122号、国道463号、首都高速道路等の幹線道路網が充実しているとともに、東北・上越・北陸新幹線を始め、JR・私鉄各線が集結する大宮駅は、東日本の鉄道交通の要衝となっています。

近年は、首都圏広域地方計画において、本市が東日本の対流拠点に位置付けられたことから、ヒト・モノ・情報が集まる東日本のネットワークの結節点としての連携・交流機能の集積・強化等が求められており、大宮駅周辺においては、「大宮駅グランドセントラルステーション化構想」が動き出しています。

さらに、新たな産業集積拠点の創出に目を向ければ、大消費地である東京の後背地で企業からの立地・進出ニーズが多いことから、新大宮上尾道路の沿線周辺を含む複数の候補地を選定し、今後検討を進める予定です。

このようなことから、本市にとって新中山道の整備は、人・モノ・情報の集積・交流機能の強化、更なる市民満足度の向上、防災機能の強化、産業立地など、様々な観点から多大なストック効果を発現し、市民の方々に、「住みやすい」、「住み続けたい」と感じていただけるまちづくりを実現するために、非常に重要であると考えております。

駅からシンボル都市軸を望むイメージパース
イメージパースは確定しているものではありません。デザインの詳細等についても、今後検討していきます。
（出典：大宮駅グランドセントラルステーション化構想）



対象範囲

つながり、結ぶ

TOPICS

熊谷市
新しい中山道とともに

熊谷市は、埼玉県の北部に位置し、市の南北に流れる荒川と利根川の二大河川や都市近郊の田園、緑豊かな丘陵地などの自然環境を有しています。

また、かつて江戸時代に幕府が整備した中山道の8つ目の宿場町であり、多くの人々や物資が行き交う中山道の中でも、有数の規模を誇りました。さらに、江戸から秩父へと向かう秩父街道の分岐点として重要な位置を占め、陸上交通の要衝として発展してきました。

現代に入り昭和20年、第二次世界大戦終戦前夜の「熊谷空襲」による被害は甚大で、県下唯一の戦災都市に指定され、戦災復興土地区画整理事業が行われました。それにより、国道17号は本市の中心市街地の基軸として整備され、関東一の祇園熊谷うちわ祭の際には、山車・屋台が巡行し、祭りのステージとして市民に親しまれています。

また、鴻巣市箕田を起点とし、熊谷市高柳に至る国道17号熊谷バイパスが整備されており、平成16年には交通渋滞のボトルネック箇所とされていた交差点2つが立体交差化（柿沼肥塚立体）、令和元年には熊谷市上之地内の一部区間が6車線化されました。

このように、現在でも中山道は、本市において文化や経済など様々な面で地域生活の軸を担う重要な路線となっています。

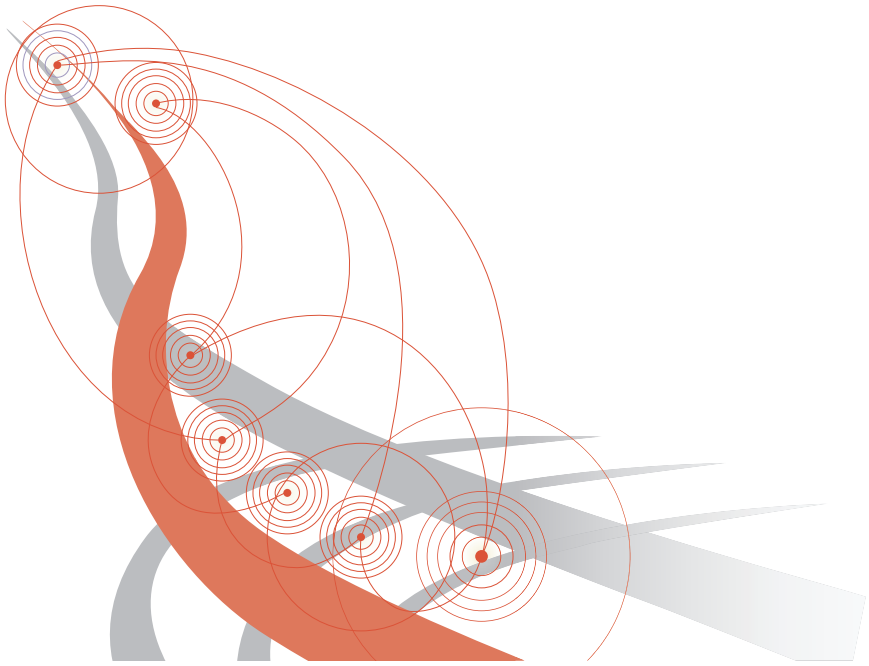
広域的な面に目を向けると、平成27年に首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道）の埼玉県区間が開通したことで、企業立地の促進等のストック効果が発現していますが、その効果は近郊に止まっています。そのため本市では、圏央道までのアクセスが重要な課題となっており、現在事業中の上尾道路のⅡ期区間は、圏央道桶川北本インターチェンジと熊谷バイパスの起点を直接結ぶ路線であることから、大きな期待を寄せています。

また、現在熊谷市では熊谷バイパスと国道125号の交差部に道の駅の整備を計画しており、国道2路線に面する恵まれた立地条件を活かし、食と農をテーマとした産業拠点としての整備を推進しています。都市拠点である中心市街地や、スポーツ・文化・健康拠点である熊谷スポーツ文化公園と連携し、農業、商業、観光等の市内産業の活性化を図ることを目指しています。

中山道とともに発展してきた本市ですが、これからも「新中山道」とともに、新たな時代に対し、持続可能で魅力的なまちづくりに取り組んでまいります。

道の駅計画地付近の航空写真
道の駅計画地は国道 17 号熊谷バイパスと国道 125 号の交差部です。

2021 年 3 月発行



“つながり” が生み出す地域のちから

――― 人、地域には元々持つ、備わっている力がある。それらがつながり面となって広がることでポテンシャルはさらに高まり、未来に向けて新たなちからとなる。

道がつながる、地域と地域がつながる、人がつながる、そしてそれ等が持つちからがつながり、新たな多様な価値を創出し豊かな地域、輝かしい未来を創造することが出来る。様々な分野の知恵、ノウハウ、技術、経験を連携、協働することで高いパフォーマンスが生み出される。

その可能性を示し発信する、「地域と道」が創る冊子 ―――

国土交通省 関東地方整備局
大宮国道事務所
〒 331-9649　埼玉県さいたま市北区吉野町 1 丁目 435 番
TEL.048-669-1205（計画課）
https://www.ktr.mlit.go.jp/oomiya/